

石川県青年団協議会 平和研修 「青年が「平和」について考える機会を」

石川県青年団協議会では年に一度、「平和研修」と題して、主に全国各地の戦争にまつわる場所や施設を巡り、当時の資料を目にしたり、語り部の話を聞いたりすることで青年が平和について考える機会を設けています。とりわけ石川県は幸いにも大きな空襲などの戦災が無かったため、身近に戦争の記憶が残っておらず、戦争や平和についての意識が高まりにくいところがあります。

私たちは「現地に赴き現地の人々の声を聞く」ことに重点を置き、様々な視点から戦争や事象を見ることで青年一人ひとりが二度と戦争をしない平和な社会を構築するために、今を生きるものとして何ができるか考えてもらえるよう、これまで様々な場所を訪問してきました。

平成二十六年 平和研修in広島 「被爆体験を当事者から聞く」

平成二十六年は太平洋戦争時に原爆が投下され、大きな被害を受けた広島県を研修先としました。各地の青年団員と平和研修の内容

について相談していた中で、原子爆弾や原爆ドーム、折り鶴の逸話など、事象や名称としては知っていても、実際に訪れたことのある青年が思った以上に少なかったことから広島を研修先として選定しました。



研修では当時の体験談を広島県原爆被害者団協議会理事長の坪井直さんから直接当時のお話を伺うことができました。二十歳で被爆され、被爆の体験をしつかりと記憶しており、細かい描写なども話してくださいました。その中でも大混乱の中で助けることのできなかった少女の話など、思い出すのも辛い体験を語っていた、あたたかみで戦争の悲惨さと核兵器がもたらすものを考えさせられる研修となりました。

平成二十八年 平和研修in仙台 「戦争がない＝平和」ではない

平成二十八年は宮城県の仙台市、石巻市を訪れました。仙台市は戦争の終結も近づく昭和二十年七月十日にB-29による無差別爆撃が行われ、多くの命が失われました。この仙台空襲からの復興を記念して、戦災の記録を展示した仙台市戦災復興記念館を見学し、一般市民が巻き込まれる近代の総力戦の恐怖を学ぶことができました。また、この年の平和研修は「平

和」とは戦争がない状態だけでなく、すべての人が安心して暮らせる社会ではないか」との考えから東日本大震災で大きな被害を受けた石巻市にも足を運び、宮城県青年団連絡協議会の仲間から震災当時の話を聞かせてもらいました。



この時見学した、「南浜つなぐ館」のあった南浜町は、震災前は大きな住宅街でした。震災翌年に訪れた人によると、そこには流された家屋の残骸や唯一残った土台がそこかしこに見え、まさに「被



「災地」であったそうです。しかし、訪問時はどう見ても雑草の生い茂った河川敷にしか見えませんでした。

震災の記憶の風化は、被災者の傷をいやしてくるものでもありますが、被災した人々のことを忘れてしまうこともあり得ます。震災に遭われた方の犠牲を無駄にしないためにも、伝えていくべきものをしっかりと未来に残していくかなければならないと改めて考えさせられる機会となりました。

平成三十年 平和研修 in 沖縄 〜基地問題を身近に感じる〜

平成三十年は沖縄県を訪問しました。まずは「沖縄戦終焉の地」糸満市摩文仁の平和祈念公園を訪れました。ここには沖縄戦の写真や遺品などを展示した平和祈念資料館、沖縄戦で亡くなられたすべての人々の氏名を刻んだ「平和の礎」、戦没者の鎮魂と永遠の平和を祈る「平和祈念像」が置かれています。そして府県、団体の慰霊塔が五十基建立されており、その中

には石川県出身将兵の慰霊塔である「くろゆりの塔」も建立されています。

また、この年は訪問直前の九月三十日に沖縄県知事選挙があり、米軍辺野古新基地建設反対の候補が当選したことを踏まえ、沖縄県青年団協議会の皆さんから米軍基地に對しての思いや意見を直接伺うことができました。基地問題はテレビなどではよく耳にしますが、どこか沖縄を遠い海外のように感じ、沖縄を取り巻く問題に對しても関心が低かった参加者も、現地で沖縄戦の惨禍や基地問題を直接見聞きすることで一層身近に感じられるようになった研修でした。

令和元年 平和研修 in 鹿児島 〜青年達は何を考えたのか〜

今回の平和研修は鹿児島県の知覧を選定しました。

鹿児島県南九州市知覧町には太平洋戦争時に陸軍飛行学校の分教所（訓練所）が設けられていました。この分教所が戦局の悪化に伴い知覧特攻基地へと改組され、終戦までの間に多くの若者がここから飛び立ち、そのほとんどが二度と帰ってこることはありませんでした。

戦後、特攻戦死された隊員の当時の真の姿を後世に残し、恒久の



平和を祈念するため、知覧特攻平和会館が建設され、隊員の遺書・遺品が展示されています。

これに先立ち、参加者に特攻に関するドキュメンタリーを視聴してもらい、平和会館見学後にはホテル富屋食堂も併せて見学することで「特攻」という事象に對して様々な角度から当時の青年たちが何を思い銃を取り、また特攻作戦に従事したのかを考えてもらいました。

平和について「考える」こと

私たちが石川県青年団協議会も加盟している、日本青年団協議会が掲げる平和運動へのスローガンに『青年は二度と銃を取らない』があります。これは戦争から復員した青年が荒廃した郷土を目の当たりにして、二度と戦争のない社会をつくろうと掲げた言葉です。

しかし、ただこのスローガンを叫ぶだけでは平和な社会は実現しません。過去の戦争の惨禍をできる限り近くで、できる限り当事者から話を聞くことで私たち一人ひとりが「なぜ、こうなってしまったのか?」「どうすれば良かったのか?」と考え、平和について関心を持ち続け、次世代に語り継いでいくことが平和な社会の建設につながるかと信じて、今後も青年に平和について考える機会を提供していきます。